

**2015年 第31回写真の町東川賞**

受賞者発表

受賞式及びフォトフェスタ案内

北海道上川郡東川町

\*\*\*\*\*

<お問い合わせ先>

東川町写真の町実行委員会

〒071-1423 北海道上川郡東川町東町1丁目19番8号 東川町文化ギャラリー

写真の町課・写真の町推進室(担当:竹部・窪田)

TEL.0166-82-2111/FAX.0166-82-4704

<http://photo-town.jp/>

\* 受賞作家の顔写真及び作品画像をデータにてご用意しております。

## 第31回写真の町東川賞受賞作家

<海外作家賞> 対象国:ニュージーランド

アン・ノーブル氏 (Anne Noble)

受賞理由: 写真集「The Last Road」(Clouds、2014)他、一連の作家活動に対して

<国内作家賞>

佐藤 時啓氏 (さとう・ときひろ)

受賞理由: 写真展「光ー呼吸」(東京都写真美術館、2014年)及び一連の作家活動に対して

<新人作家賞>

春木 麻衣子氏 (はるき・まいこ)

受賞理由: 写真展「みることについての展開図」(TARO NASU、2014年)に至る一連の作家活動に対して

<特別作家賞>

吉村 和敏氏 (よしむら・かずとし)

受賞理由: 写真集「CEMENT」(ノストロ・ボスコ、2010年)に対して

<飛弾野数右衛門賞>

福島 菊次郎氏 (ふくしま・きくじろう)

受賞理由: 郷土の瀬戸内を出発点とし、広島の問題を皮切りに、戦後日本の問題を一貫して撮り続けた活動に対して

第31回写真の町東川賞審査会委員（敬称略／五十音順）

浅葉克己 <あさば・かつみ> アートディレクター

笠原美智子 <かさはら・みちこ> 写真評論家

楠本亜紀 <くすもと・あき> 写真評論家、キュレーター

上野 修 <うえの・おさむ> 写真評論家

野町和嘉 <のまち・かずよし> 写真家

平野啓一郎 <ひらの・けいいちろう> 作家

光田由里 <みつだ・ゆり> 美術評論家

山崎 博 <やまざき・ひろし> 写真家

## 第31回写真の町東川賞審査講評

第31回写真の町東川賞審査会は2015年2月16日に桑沢デザイン研究所で開催された。国内賞30人、新人作家賞34人、特別作家賞11人、飛弾野数右衛門賞18人、海外作家賞13人、計106人の写真家がノミネートされた。委員は10時に集合し、ノミネートされたアーティストの歴大な作品を丁寧に閲覧し、食事を挟んで1時30分から審議に入った。山崎博委員は当日の急な体調不良で欠席。野町和嘉委員も海外出張のため欠席したが、事前に推薦者を事務局に託し、審議に代えた。

国内作家賞は佐藤時啓氏が選ばれた。国内賞の審議に入る前に、東川賞の関わりが深い佐藤氏を賞の対象にすることの是非が話し合われたが、批判が出る可能性を勘案しても、なおあまりある実績を考慮して敢えて残し、その後の国内賞の審査で満場一致で選出された。「光－呼吸」展（東京都写真美術館）は、カメラの構造や写真の原理に切り込み、光・身体・時間・空間をテーマにした佐藤氏の集大成とも言える圧巻の展覧会だった。

意見が割れたのは新人作家賞である。若手から中堅作家の仕事は、毎年のことながら、層が厚い。何度かの投票と話し合いを経て、最後まで残ったのは、春木麻衣子、佐藤信太郎、林典子、村越としや。まったく異なる作風の作家たちが残った。僅差で春木麻衣子氏が新人作家賞を受賞した。ここ15年ほどこつこつと活動を重ね、国内外のグループ展に招聘されて、評価が高まっているアーティストである。新作〈みることの展開図〉の、画面を覆う黒い空洞は、日本の今を象徴しているようにも見えた。

北海道にゆかりのある作家に送られる特別作家賞には吉村和敏氏が選ばれた。国内外で精力的に風景写真をものにしている作家だが、今回は特に、北海道北斗市のセメント工場をテーマにした写真集『CEMENT』が評価されての受賞となった。細部から遠景まで大型カメラで写したカラー作品は、セメント工場の存在感と意味を考えさせると同時に、そこに造形の美しさを見出し讃えた力作である。

地域に貢献のある作家に送られる飛弾野数右衛門賞は、福島菊次郎氏に決定した。近年、氏の半生を紹介したドキュメンタリー映画「ニッポンの嘘」が公開され注目を集めている。広島の被爆者を長年撮影しただけでなく、三里塚闘争や公害、原発に至るまで、日本というひとつの「地域」の負の歴史を、一貫して弱者の立場で表現している驚くべき報道写真家である。

今年の海外作家賞の対象国はニュージーランド。オークランド・フォト・フェスティバルの協力も得て、楠本亜紀委員がオークランドとウェリントンで調査し、13人の作家がノミネートされた。いずれもニュージーランドを代表する作家である。その中でアン・ノーブル氏が圧倒的多数で選ばれた。娘の口をクローズアップした印象的なシリーズや南極をテーマにした作品で知られる。セクシュアリティ、人間と自然の関係、表象の問題など、多くの現代人が抱える問題を、時にユーモラスに、鮮やかに描き出してきたアーティストである。

今年で31回目を数える写真の町東川賞。「写真文化首都」に相応しい素晴らしい作家たちを選出したと審査会は自負している。しかしこれは一朝一夕に実現したことでも、審査会だけの力でもなく、1985年の「写真の町宣言」から31年、一步一步積み重ねた町の人たちの努力とそうした趣旨に共感した世界中の多くの人たちの共感の上に成り立っている。「写真文化首都」宣言には以下のように書かれている。「この小さな町で世界中の写真と出逢い、世界中の人々と触れ合い、世界中の笑顔が溢れるように」、そしてそのために東川町は「写真文化と世界の人々を繋ぐ役割を担う」という重責を自らに課している。受賞した素晴らしいアーティストを加え、東川町の人々と共に、31年目からまた新たな一步を踏み出していきたい。

写真の町東川賞審査会委員 笠原美智子

第31回写真の町東川賞  
＜海外作家賞＞

アン・ノーブル氏  
(Anne Noble)

ニュージーランド・ウェリントン在住



1954年ニュージーランド北島西海岸にあるワンガヌイ生まれ。ウェリントンにあるヴィクトリア大学にて社会学、人類学を学んだ後、写真家としての活動をはじめ。オークランド大学エラム美術学校の大学院在学中から実験的な作風、及びワンガヌイ川を撮影した詩的なモノクロ写真シリーズ(1980年代初頭)で脚光を浴びる。美しさのなかにも複雑さと確たるコンセプトを胚胎した作品で、ニュージーランドを代表する写真として国内外で活躍する。現在はウェリントンにあるマッセー大学の特別荣誉教授をつとめる。アーティストとしてだけでなく、キュレーター、教育者としても、幅広い活動を精力的に行っている。

1998－2006年にかけて、娘とのコラボレーションから生まれた「Ruby's Room」は、口を使って食べる、遊ぶという幼年期の行為を、極めて独自の観点と色彩によって描き出した作品として国際的にも評価が高い。2001年からは数度の助成を得て南極に滞在し、南極についての想像と現実のギャップをテーマにしたシリーズ「Ice Blink(氷映)」(2011)「The Last Road(最後の道)」(2014)等を展開。最近では、複雑な自然のシステムに対する世界的な脅威について、蜂と人間の共生をテーマにしながら、科学者や養蜂家らと共同した作品を制作している。

＜作家の言葉＞

様々な主題の作品を通して、私は場所や身の回りの物が持つ個人的な、また文化的な物語の記憶と想像力の持つ意味に興味を持ってきました。プロジェクトはたいてい長期にわたり、書籍、展覧会、静止画や動画を組み込んだインスタレーションに帰着します。

**南極シリーズ** Ice Blink(2011)は、写真がいかに関所の経験に対する私たちの想像と期待を作り上げているか、を表す南極の観光写真、及び博物館やディスカバリーセンターで撮られた南極のイメージです。The Last Road(2014)は、人間が大陸に与えた影響の、より荒涼たる物語を描き、「未開地(Wilderness)」や南極という言葉で我々が連想する従来の視覚イメージと物語に異議を唱えます。Whiteout(ホワイトアウト)」(出版予定)は、南極の光と場所の画像シリーズ。南極に関する人間の知覚と認識の脆弱さをあらわにするイメージの探究の結果です。

**SONG STING SWARM(針の群れの歌)シリーズ**

この新作では、複雑な自然のシステムと私たちとの関係を心に描き、表す新しい方法を探っています。私は蜜蜂を飼い、蜂と共に働いています。自然界から離れるのではなく、自然界との関わりの中にある脆さの美学を通して、観る側を魅了する写真に関心があります。

第31回写真の町東川賞  
＜国内作家賞＞

佐藤 時啓  
(さとう・ときひろ)  
さいたま市在住



1957年山形県酒田市生まれ。1984年東京藝術大学大学院美術研究科彫刻専攻修了。1990年第6回東川賞新人作家賞受賞。1993年 ダイムラーアート・スコープ賞グランプリ受賞によりフランスに滞在。1994年 文化庁在外研修員としてイギリスに滞在する。国内での展覧会も多数開催するほか、海外での評価も高く、第9回バンガラデシュ・アジア・アート・ビエンナーレ(99年)、シカゴ美術館個展(05年)など多数の展覧会に参加している。2014年東京都写真美術館で開催された個展「佐藤時啓 光－呼吸 そこにいる、そこにはいない」にて、芸術選奨文部科学大臣賞を受賞。現在、東京芸術大学美術学部先端芸術表現科教授。

代表作の一つである「光－呼吸」シリーズは、自身がランドスケープの中に入り込み、ペンライトや手鏡に反射させた太陽光の軌跡を、長時間露光によって定着したもの。自作した複数のピンホール・カメラを用いて、360度のパノラマ写真を撮影する「Gleaning Lights」シリーズや、人が中に入れる移動式カメラオブスキュラを使った「Wandering Camera」シリーズなどは、カメラの始原的光学性の可能性を、現代において問い直す実験的な試みである。写真装置に焦点をあてることを通じて、光、時間、空間、身体をテーマに、見えるものと見えないもの、固有性と普遍性を問いかける作品を発表している。

＜作家の言葉＞

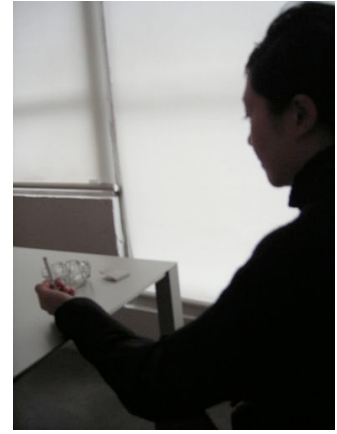
長時間露光や針孔写真、そしてカメラオブスキュラをもとに、写真が写ることと見えることのズレを媒介にして、生命の在り様、その存在を表現したいと考えています。不在ということは、むしろ在ることを希求しイメージさせるものではないでしょうか。初期の身体性にこだわった光のシリーズから、最近では新たな写真術によるイメージの生成を試みっていますが、写真美術館の「そこにいる、そこにはいない」展を評価いただき大変に光栄です。

今回受賞のお知らせを受け、内心、昨年まで審査会に属していた立場として、心穏やかではなく、その是非について逡巡しました。しかしながら、最終的には90年の新人作家賞受賞以来25年ぶりに新作を東川町に展示したいという欲望が勝りました。東川賞審査会の皆様、東川町の皆様。そして写真美術館の皆様、また家族をはじめお世話になった皆様、今回の受賞、衷心より感謝申し上げます。

佐藤時啓

第31回写真の町東川賞  
＜新人作家賞＞

春木 麻衣子  
(はるき・まいこ)  
東京都在住



1974年茨城県生まれ。1995-1996年玉川大学文学部在学中に、ゴールドスミス・カレッジ交換留学。1997年同大文学部芸術学科卒業。主な展覧会に「六本木クロッシング2007:未来への脈動」(森美術館、2007年)、「日本の新進作家展vol.10 写真の飛躍」(東京都写真美術館、2011年)、「あざみ野 フォト・アニュアル 写真の境界」(横浜市民ギャラリーあざみ野、2014年)、「みることについての展開図」(TARO NASU、2014年)など。森美術館、高松市美術館、太宰府天満宮等に作品が収蔵されている。

極端にアンダーにした露出から生じた画面の大部分を覆う漆黒と、そこから溢れでるまばゆい光が印象的な初の作品集『●○』(大和ラヂエーター製作所、2005年)は、その斬新かつ洗練された表現によって注目を浴びる。『possibility in portraiture』(1223現代絵画、2011年)では、建造物だけでなく、移動する人物も重要なパーツを占めることによって、境界の要素に加え時間の問題も問いかける作品になっている。剥製を被写体とした新作「みることについての展開図」シリーズは、意図的にひとつの被写体を様々な角度から撮影し、対象を分解し複数の視線を同一平面上で再構成したもの。「みる」という行為について、切り詰められた表現のなかから、時間と空間の両側面に対する深い考察をうながしている。

＜作家の言葉＞

世の中は白と黒で割り切れないグレーな世界なのだというのも、承知尽くの前提です。  
あたりまえだけれど、想像は作家の専売特許じゃない。  
観るひとが想像するからこそ、写真とか作品が、この世界で生きてくるのだと信じています。

受賞をつくり続ける勇気にかえます。

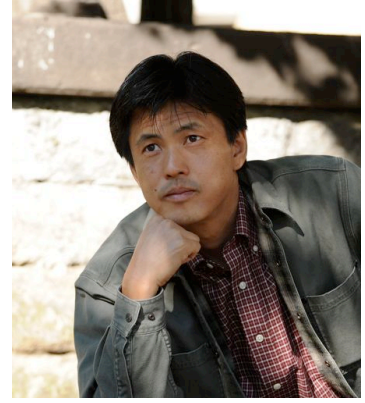
写真を通じて出会い関わった皆さんに、こころから感謝申し上げます。

春木麻衣子



第31回写真の町東川賞  
＜特別作家賞＞

吉村 和敏  
(よしむら・かずとし)  
東京都在住



1967年長野県松本市生まれ。長野県立田川高校卒業後、東京の印刷会社で働く。退社後、1年間のカナダ暮らしをきっかけに、写真家としてデビューする。以後、東京を拠点に世界各国、国内各地を巡る旅を続けながら、意欲的な撮影活動を行っている。自ら決めたテーマを長い年月を費やしながら丹念に取材し、作品集として発表する一方、近年は文章にも力を入れ、雑誌の連載やエッセイ集の出版など、表現の幅を広げている。2003年 カナダメディア賞大賞受賞、2007年写真協会賞新人賞受賞。

カナダ東海岸にあるプリンス・エドワード島で撮影した写真集を皮切りに、これまでに30冊を超える作品集を出版。20年間にわたる世界各地の旅のなかでとらえた、夜明け前と夕焼け後のわずかな時間に訪れる、空一面が青く染まる瞬間をまとめた『BLUE MOMENT』(小学館、2007年)は、その魅力的で幻想的な写真によって多くの人を魅了した。近年発表した『Sense of Japan』(ノストロ・ボスコ、2009年)、『Shinshu』(信濃毎日新聞社、2011年)、『SEKISSETZ』(丸善出版、2013年)は、日本の風景に回帰した新たな試みとして注目される。北海道北斗市にあるセメント工場を撮影した写真集『CEMENT』(ノストロ・ボスコ、2010年)は、その即物的ともいえる眼差しによって、日本を代表する巨大産業の現実と、その細部に宿る美を浮き彫りにした。

＜作家の言葉＞

まだ雪が残る3月、講演の仕事で北海道北斗市を訪れた私は、巨大なセメント工場と出会いました。日本を代表する産業が、北の大地にしっかりと根を下ろしている姿に深く心を打たれ、その時はじめて、日本の一つの風景として「テーマにしたい」と考えたのです。

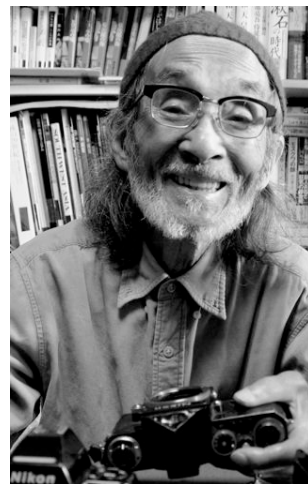
その年の夏、会社から正式な許可が下りると、数週間北斗市に滞在し、撮影を行いました。鉱山、工場、栈橋で目にするすべてのものに、新鮮な驚きと感動が満ちており、同時に究極の「美」を感じ取った私は、4×5inchの大型フィルムカメラと大型センサーを持つデジタルカメラを使い、1枚1枚丁寧に作品を生み出していきました。

セメントは、普段、我々の暮らしに欠かせないものです。しかし多くの人々が、それがどこから来て、どのように生み出されてきたのか、意識することはありません。この一連の流れを間近で見て、知識として吸収しただけでも、私はこのプロジェクトを成し遂げてよかったと思います。

吉村和敏

第31回写真の町東川賞  
＜飛弾野数右衛門賞＞

福島 菊次郎  
(ふくしま・きくじろう)  
山口県 柳井市在住



撮影: 那須圭子

1921年山口県下松市生まれ。網元の四男として生まれる。1945年二等兵として敗戦を迎え、翌年より郷里で時計店を営む一方で、広島の被爆者や、瀬戸内離島での撮影を始める。広島に被爆者一家の苦闘と困窮生活を10年にわたって撮影した作品「ピカドン ある原爆被災者の記録」で、1960年日本写真批評家協会賞特別賞を受賞。

1961年に上京し、学生運動、自衛隊と兵器産業、三里塚闘争、公害問題、若者の風俗など、時代を象徴する多岐にわたる問題を写真に収め、雑誌等で精力的に発表した。1982年、国家権力に対する反発から、瀬戸内海の無人島での自給自足生活を62歳よりはじめる。病気のため島での生活を断念するなか、『戦争がはじまる』(社会評論社、1987年)と『瀬戸内離島物語』(同左、1989年)を刊行。1989年の昭和天皇逝去を受け、日本の戦争責任と戦後の在り方を問う自作写真パネルによる移動写真展を開始し、現在でも各地で展示が行われている。

2003年より、文章による『写らなかった戦後』シリーズの執筆をつづけるほか、2012年には映画『ニッポンの嘘 報道写真家 福島菊次郎90歳』が公開される。『証言と遺言』(デイズジャパン、2013年)などの出版も相次ぐなど、戦後史の証言者として、近年新たな注目を浴びている。

＜作家の言葉＞

写真の創生期だったダゲレオ時代を除けば、「文化」としての 写真が民衆のものとなったのはせいぜい戦後の70年間ですが、その存在を町並全体に表現した飛び切りユニークな存在が、雪に埋もれた北海道の真ん中にあることを知って驚いています。94歳の老齢で歩行も困難なため、授賞式には東京の娘に行ってもらうことにしました。父子家庭だった東京生活の中で、彼女は小学校時代から僕が暗室で焼いた写真を乾燥したり、スポット(修正)まで手伝ってくれる孝行娘だったからです。

さて、僕の余命もあと1年くらいです。「無駄なことをするもんだ」と自嘲しながらあれこれ身の整理をしています。人生の「整理」などできる筈もないことを思い知らされるばかりです。人の死は後に残された者の胸に刻印されるだけですが、福島菊次郎が敗戦直後から心血を注いで撮影した「日本の戦後」の膨大な記録を、これからの若者たちが国を見つめる機会に役立ててくれるなら、これほど嬉しいことはありません。

福島菊次郎

## 第31回東川町国際写真フェスティバル

### ～写真の町東川賞関連事業・自由フォーラム2015～

#### <受賞作家作品展>

会期：8月8日（土）～9月2日（水） 会期中無休

時間：10：00～17：30（8月9日は15：00～21：00）

会場：東川町文化ギャラリー

料金：町内100円、町外200円（8月9日、10日は無料開放）

海外作家賞・・・アン・ノーブル

国内作家賞・・・佐藤時啓

新人作家賞・・・春木麻衣子

特別作家賞・・・吉村和敏

飛弾野数右衛門賞・・・福島菊次郎

#### ●8月8日（土）

14：00～14：45 授賞式（会場：東川町農村環境改善センター・大ホール）

15：00 テープカット（会場：東川町文化ギャラリー）

15：30～17：00 レセプション（受賞を祝う集い）

#### ●8月9日（日）

13：00～17：30 受賞作家フォーラム（会場：東川町文化ギャラリー）

パネラー：東川賞受賞者、東川賞審査員、ゲスト

## ■■■ 写真の町とは ■■■

1984年、東川町に開墾の跡がおろされてから満90年のとき。10年後に迎える100年に向け、後世に引き継いでいく町の未来をどのように思い描くかを考えました。東川は大雪山国立公園の大自然に恵まれた町であり、多くの写真の被写体となってきました。この美しい環境を後世のために守り育てながら、人々がいきいきと暮らす町であり、住民でありたい。そして、このまだ若い町よりも、わずか半世紀ほどはやく生まれた若い文化である写真。若い町が若い文化に取り組むことで、どこにもない独自の文化や新しい伝統を育てることができる。そうすることでこの町が日本や世界での役割を担い、心豊かな暮らしを育てていくことにつながると考えました。

1985年6月1日、東川町は豊かな文化田園都市づくりをめざして、とてもユニークな「写真の町宣言」を行いました。写真文化によって町づくりや生活づくり、そして人づくりをしようという、世界でも類例のない試みです。出会いを永遠に記録する写真による、町の美を永遠にとどめるための活動は、今もさらに展開し続けています。

この「写真の町宣言」にうたわれた、写真によって出会いにみちた町にしようという理念を実現し、「写真の町」の一年間の集大成と翌年への新しい出発のための祭典として、1985年から毎年夏に「東川町国際写真フェスティバル(愛称:東川町フォトフェスタ)」が開催されています。

東川町フォトフェスタは、全体の会期を約1カ月とし、7月末に設定されたメイン会期には、写真の町東川賞授賞式を中心に、受賞作家作品展やシンポジウム、写真家たちと出会う各種パーティ、新人写真家の登龍門ともいえる写真インディペンデンス展、写真愛好家・大学生によるストリートギャラリー、写真と音楽のコラボレーションなど、写真が異分野の文化と出会うイベントも多数行われます。

また、メイン会期の前後には、各種写真展や写真ワークショップ、写真教室、町民写真展、小学生から中学生を対象とした写真少年団活動など、会期全体を通じて、芸術としての写真から大衆的な写真とのかかわりまで、訪れる人々や町民に幅広いプログラムで写真文化の魅力を伝えています。

さらに、1994年からはじめられた、全国の高校の写真部やサークルを対象にして行われる写真大会「写真甲子園」では、地元サポーターの応援のもと、全国から集った高校生たちが北海道を舞台に写真を撮影し、熱戦を繰り広げます。

2014年3月6日、30年に亘る「写真文化の積み重ね」、そして地域の力を踏まえ、私たちは未来に向かって均衡ある適疎な町づくりを目指し「写真文化首都宣言」を行いました。「写す、残す、伝える」心を大切に写真文化の中心として、写真文化と世界の人々を繋ぐ役割を担うことを決意するものです。

## ■■■ 写真の町東川賞規定 ■■■

### ●趣旨

写真文化への貢献と育成、東川町民の文化意識の醸成と高揚を目的とし、これからの時代をつくる優れた写真作品(作家)に対し、昭和60年(1985年)を初年度とし、毎年、東川町より、賞、並びに賞金を贈呈するものです。

### ●賞

写真の町東川賞<海外作家賞>	1名	賞金100万円
写真の町東川賞<国内作家賞>	1名	賞金100万円
写真の町東川賞<新人作家賞>	1名	賞金 50万円
写真の町東川賞<特別作家賞>	1名	賞金 50万円
写真の町東川賞<飛弾野数右衛門賞>	1名	賞金 50万円

\*2010年の改定により賞金が増額され、新たに飛弾野数衛門賞が創設されました。

### ●対象

海外作家賞は、世界をいくつかの地域に分割し、年毎に、その対象地域を移動させ、やがて世界を一巡するものとし、発表年度を問わず、その地域に国籍を有しまたは出生、在住する作家を対象とします。

国内作家賞及び新人作家賞は、発表年度を過去3年間までさかのぼり、写真史上、あるいは写真表現上、未来に意味を残すことのできる作品を発表した作家を対象とします。

特別作家賞は、北海道在住または出身の作家、もしくは、北海道をテーマ・被写体とした作品を撮った作家、飛弾野数右衛門賞は長年にわたり地域の人・自然・文化などを撮り続け、地域に対する貢献が認められる者を対象とします。

### ●審査・表彰

東川町長が依頼するノミネーターにより推薦された作品を、東川町長が委嘱した委員で構成する[写真の町東川賞審査会]において審査します。また、授賞式は毎年、東川町国際写真フェスティバル開催期間内に東川町内で行い、あわせて受賞作品展、記念シンポジウム等を開催します。

### ●その他

受賞者には対象作品の中から任意に、東川町民にオリジナル・プリントを寄贈していただき、東川町民は、その作品を永久的に、大切に保管し、写真の町・東川町を訪れる人々に公開する責任をもち、[写真の町・東川町文化ギャラリー]に展示し、友好や文化に貢献できるよう努めます。

賞の対象数は、これを固定するものではありません。より多くの優れた作家に贈呈することを、目的の発展と考えます。他者からの賞の増設・新設申し出等に関しては、積極的に合議します。